

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



「分かりやすい授業」を超え、
「生徒がもっと学びたくなる」授業へ

石川県立金沢桜丘高校

前田昌寛先生

36歳

私が乗り越えてきたもの

進学校の生徒にも評価された授業

29歳の時、進路多様校から金沢桜丘高校に赴任しました。最初の授業では、生徒が始業時に既に準備していることに驚きました。実際に授業を始めると、生徒は私の言葉にしっかり耳を傾けてくれる。授業のしやすさと同時に、プレッシャーを感じました。

私の理想は「分かりやすい授業」でした。また、前任校での経験から「楽しさ」を大切にしていた私は、ゲーム的な活動も授業に取り入れました。そして、赴任当時は校内でただ一人のオーリンググリッシュによる授業。英語への情

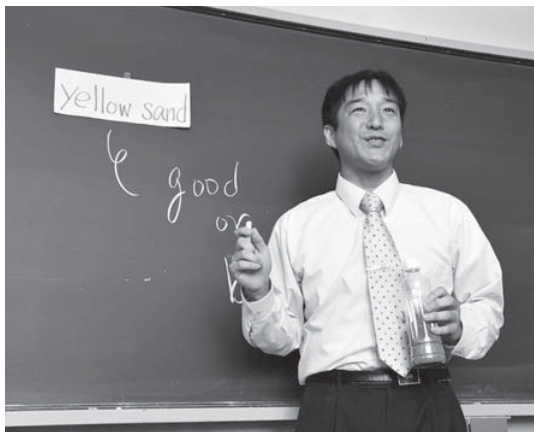
熱を生徒にぶつけるような授業だったと思います。生徒の授業評価も決して悪くはありませんでした。

考えさせる授業になっていない

ところが赴任4年目、1年生の授業で出来るだけ分かりやすいように時間を掛けて丁寧に英語で説明する私の耳に、「ヒマヤ……」という声が飛び込んできたのです。一番前の席の男子生徒がつぶやいたそのひと言に対して、私は何も言い返せませんでした。楽しくて、分かりやすく、熱意の伝わる授業をしたいと思っていました。

授業で懸命に説明する私が聞いた「ヒマヤ」の声

た。しかし、それだけで生徒の中に学問的な興味や、自分で学ぼうとする気持ちは生むことが出来るのか、私は深くは考えていませんでした。英語で授業をしたことに満足し、生徒の様子をしっかりと見取った上で、生徒を引き込む指導が出来ていなかったのです。更に、1年生の時は積極的に授業に参加していたのに、2年生になると急に声が出なくなる生徒が増えていることに気が付きました。生徒が成長し、「楽しい」と感じる事柄が変わっていたことをつかめていなかったのです。授業後、職員室に戻っては「表面的な楽しさだけでは、生徒は引き付けられないですね……」と周囲の先生にこぼす日々が続きました。



まえだまさひろ ◎教職歴13年。同校赴任6年目。担当教科は英語。英語教育推進室所属。
石川県立金沢桜丘高校 ◎全日制/普通科/共学。
11年度入試では、国公立大は、北海道大、筑波大、一橋大、金沢大、名古屋大、大阪大などに計229人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ522人が合格。

「正解を探す授業」からの脱却

説明が一方的にならないように気を付けたり、ペアやグループ活動を取り入れたり、試行錯誤が続きました。

同じ頃、本校は文部科学省の「英語教育改善のための調査研究」事業（当時）の指定を受け、新カリキュラムの下、英語による指導法の開発を始めました。難しい社会問題が課題文として取り上げられると、私はそれまで以上に「どうすれば分かりやすく説明できるか」を考えようと思いました。しかし、真に楽しい授業とは何かを考えたり、それは生徒が自分の考えを話したくなるような授業ではないかと思ったので

す。そして、授業で「正解を探す」のではなく、正解のない問いを生徒に投げ掛けてみようと思いました。

英文の訳し方や構造を生徒に質問し、筆者の言いたいことを効率的に探して当てるといった作業に終始するのはなく、この英文を読む意義を生徒に投げ掛け、生徒それぞれの答えを引き出すことを授業の中心に据えるようになりました。だから、生徒には「この授業は正解を出すことが目的ではない。したがって間違った答えもない」と話しています。もちろん、生徒が文法的に間違った英語を使うこともありま

ちに正確な英語にたどり着きます。

社会では、答えが一つではない中でコミュニケーションを図り、他者の考えを聞きながら自分の意見を整理することがほとんどです。授業にその過程を取り入れることで、道具としての英語を使う訓練になると考えたのです。

これまでと異なるスタイルの授業に生徒が集中し、「もう授業が終わったの？」という声が教室で聞こえた時には、大きな達成感を覚えました。

教師の人間力が問われる授業

教師が用意した正解を探す授業からの脱却を目指した結果、私の経験不足のため授業がうまくいかないこともあります。授業で取り上げるテーマにつ

「もう授業は終わり？」の声に達成感を味わう

いて私が十分勉強し、多面的に理解していないと、生徒の意見をくみ取って授業を展開することが出来ないからです。だから、授業の準備も様変わりしました。机の上での教材研究だけでなく、普段の生活の中で社会問題などに対して「自分ならどう考えるか」を自問することが多くなったと思います。教科の知識以上に、一人の人間としていろいろな経験をすることが授業で生きてくるのだと実感しています。

一人の生徒の意見を基にクラスみんな議論し、視野を広げ、考えを深められたときは、とても楽しいものです。これからも生徒の表情やひと言を真摯に受け止めながら、教師としての成長を模索し続けたいと思います。

前田先生 の 授業実践



Q&A

Q 日々の授業で、生徒を引き込むために特別に気を付けていることはありますか？

A 私は「授業は最初の3分間が肝心」だと思っています。スムーズに英語を学ぶ意識に切り替え、学習内容に関心を向けさせることが重要だからです。そこで私は、出来るだけ授業の冒頭に関連する写真や資料を見せるようにしています。生徒に「先生はなぜこれを持ってきたのだろう」と考えさせることが出来れば、その瞬間関心はこちらに向いているわけです。関心を向ける材料がない時は、導入時に小テストを用いて気持ちを切り替えさせます。英語の授業に入る姿勢をつくらせることが大切なのです。

Q 生徒に考えさせ、コミュニケーションを重視する授業になってから、授業での取り組みも変わりましたか？

A 教師が説明することよりも、生徒が活動することを重視するようになったことで、「授業の時間は、ペアワークなど授業でしか出来ないことをする」という意識が強くなりました。基本的に授業では予習は求めず、その代わりに、自宅に帰ってから復習をしっかりと行うように声を掛けています。授業で出てきた表現を覚えたり、今日自分が考えたことを改めて振り返ったりしておくように話しています。学校の授業ですべきことは何かを考えて、指導を構築したいと思っています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す前田昌寛先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスを自由にお寄せください。編集部より、前田先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp